［第 18 回　常民文化研究講座］

民具研究ワークショップ　**いまなぜ民具か？**

――実測・整理実務から地域博物館活動まで――

日時　2015 年 3 月 28 日（土）13:00-17:00
会場　神奈川大学横浜キャンパス　1 号館 308-1 会議室
報告
「民具を取りまく現状」佐野賢治（神奈川大学日本常民文化研究所所員）
「民具研究と民俗学　一地方学芸員の民俗学研究法」佐々木長生（福島県立博物館専門員）
「民具の保存と活用」菊池健策（元文化庁主任文化財調査官）
「民具の調査と方法」石野律子（神奈川大学非常勤講師）
「民具の作図と資料化」宮本八惠子（日本民具学会理事）
総合討論

民具研究の今日的意義

佐野　賢治

写真 1　講座風景

「いまなぜ民具か？」――このワークショップは、当初、民具実習講座の再開に当たりその開催の是非も含め、実務方面を中心に論議する場として企画された。しかし、民具を取りまく現状から、民具の定義はじめ収蔵・保存の危機まで広範な話題が扱われることになった。この問い掛けに対し 4 人の報告者がそれぞれの立場から見解を述べ、その後の総合討論では、フロアからもいくつかの意見が出された。用意した教室は満席で、テーマ自体が民具研究関係者の関心を改めて引いたのだろう。

そもそも「民具」は渋沢敬三（1896～1963）による造語であり、1921 年に設立されたアチック・ミューゼアム同人によりその後調査研究が進められ、1975 年にその後身である日本常民文化研究所が主催した民具研究講座の参加者の要請により日本民具学会が設立された。渋沢没後 50 年が経ち、日本民具学会も本年で設立 40 周年の画期を迎えた。「我々同胞が日常生活の必要から技術的に作り出した身辺卑近の道具」（『民具蒐集調査要目』1936）である民具の言葉とその持つ意味が少なくも世の中に知られ、また資料館や博物館の展示などを通して一定の市民権を得てきた。その一方、今日、主に高度経済成長期に不用・不要とされ蒐集、収蔵された実物の民具は市町村合併などの影響も受け、有形民俗文化財は別として行政当局より同一民具の廃棄や資料館の休・廃館が要請され

るなど、二度目の滅失の危機の中にある。

このような現状を踏まえ、民具の学術資料化（石野・宮本）、文化資源化（佐々木・菊池）の二方面から話題提供がなされた。従来、物質文化である民具の記録にあたっては映像記録はじめ正確な実測図が必要とされてきたが、報告者からは製作や使用を反映するスケッチや観察による注記の有効性が豊富な調査事例のもとに提示された。また民具は人と道具の合成語でもある。民俗技術の伝承、地域住民の民具に対する理解と活用の在り方が長年の経験から具体的に示された。

以上、本ワークショップは、現在正・負の両様を負う状況下にある民具の意義を再検討し、学術資料化、文化資源化にあたっての将来性を多角的に論じる機会となり、常民研において一時中断している民具講座の再開にあたっての方向性と、その性格付けに大いに参考になった。

さらに国際常民文化研究の立場から、今日新たに注目されている庶民の日常生活を対象とする学問、日常史・history of everyday life 研究に対して、多くの示唆を与えることができると、日本で培われた民具研究の積極的展開の推進を指摘する発言もあった。

確かにグローバル化の中、ポストモダンから近代化の途次にある国々まで、世界の人々の生活文化が均質化する一方で個別性も持続し並行する現代社会にあって、民具は可視的な物質文化であるだけに言葉の壁を越え、互いの生活文化理解の導入に最適である。そこに学術的な民具学の可能性が広がり、また地域住民の生活の過去・現在を語り未来を志向するための判断材料、文化資源として見直される意義があると思われたのである。

写真２　佐野賢治

写真３　佐々木長生氏

写真４　菊池健策氏

写真５　石野律子氏

写真６　宮本八惠子氏